

What Maisie Knew : メイジの担う役割と「家族」

八尋, 真由実
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6788778>

出版情報 : 九大英文学. 40, pp.193-212, 1997. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



What Maisie Knew :

メイジーの担う役割と「家族」

八 尋 真由実

序

The theory of her stupidity, eventually embraced by her parents, corresponded with a great date in her small still life: the complete vision, private but final, of the strange office she filled. It was literally a moral revolution and accomplished in the depths of her nature. The stiff dolls on the dusky shelves began to move their arms and legs ... (15)¹ (Italics mine)

Henry James の中期作品である *What Maisie Knew* (1897) の幼い主人公 Maisie は、離婚し、互いを憎み合う両親の狭間で、「愚鈍」を装い、沈黙することを決意する。メイジーにとってこの沈黙は、育てられた環境によって彼女が獲得するに至った、自分自身の身を守る手段なのである。では、何故メイジーは、家族の中でこのような手段を取らなければならなかったのか。小論では、幼い子供のこのような特異な行動を通じて、主に、家族というものへの持つ意義、その中で彼女に課せられた役割、そしてその役割の放棄と彼女の成長について、考察を進めていく。

I

メイジーの無意識的な自己防衛は、両親の不仲というところに端を発する。本来、安心感を感じるべき場所である家庭の中で、両親の関係が不安定な

めに、彼女の心の中に不安が蓄積されていくことになるのである。ここではまず、彼女をこのような状態へと追いやることになった両親の關係に着目して、夫婦關係が子供に与える影響について分析する。

メイジーの父、Beale Farange とその妻 Ida は、離婚裁判において激しく互いを罵りあう。そこで公にされるのは、夫ビールの無責任な浪費癖と、妻、アイダの「美貌」の罪である。アイダばかりでなく、ビールも、非常に魅力的な美貌の人物で、そのことは、二人が社交界で、必ずと言ってよいほど周囲の人々の視線を釘付けにするということからも明らかである。このような二人であるから、考えられる可能性としては、彼らはお互いの美しさに魅了され、即座に燃え上がったロマンティックな愛情に支えられて結婚したということがある。このような、恋愛至上主義的な結婚では、結婚生活に対する期待が過剰であるため、生活をともにするうちに、現実を知ることによって失望を感じ、それまで二人を支えていた愛情が急速に色褪せるという危険性をはらんでいる。² ファランジ夫妻も、決してこの例外ではないであろう。それは、二人が離婚するに至った時点で見せる、互いに対する激しい嫌悪の感情からも明らかである。

さらに、夫婦間の力關係における葛藤が、二人の危機を助長している。というのも、ビールは、妻がビリヤードで自分を負かしたという他愛もない理由で、彼女に対して暴力を振るう夫なのである。つまり、夫は妻が自分よりも優位な立場に立つことを恐れており、妻は、自分が夫に対して力を発揮すると殴られるといった恐怖に怯えて生活しているのである。不幸なことに、夫に自分の力を暴力で封じ込められた妻は、その力のはけ口を、今度は自分より弱い立場にいる子供に向ける。この母親は、娘であるメイジーを、階段の上から突き落としたりするのである。つまり、夫に虐待された妻が子供を虐待するといった「弱いもの苛め」の力關係が、このファランジ家には生じているのである。こうなってくると、夫婦生活どころか、子供を含めた家族の生活さえ破綻してくる。そして、希望を抱いて配偶者と新たに始めたはずの生活に幻滅すると、この美しい夫婦は、互いに自分の魅力に対する不安を感じ、誰か他に自分の魅力を「正当に」評価してくれる新たな別の異性を求めることになるのである。こうして彼らは、結婚後も互いに、次々と配偶者

以外の人々との恋愛を求め続けることになるのである。

しかし、このようなビールとアイダの態度には、彼らが親であり、子供を儲けているという意識が抜け落ちていけると言える。家庭においては、子供は家族の愛情、結合の証であってもよいはずである。また、親は、子供の存在、子育てによって、刺激や喜びを感じ、ある種の充足感や達成感を持ってもおかしくはない。さらに付け加えるならば、子供を持つ以上、親は子供に対する責任を免れるわけにはいかない。それは、子供に対する愛情や保護といった精神的な側面と、実生活を支える経済的な側面から主に成立していると言えよう。³

ところが、ファランジ家では、これら全てが不十分な状況にあるのである。両親は自分自身の幸福追求に懸命であり、子供のための人生というものは考えられないのである。いや、たとえ考えているとしても、それは彼らにとって「お荷物」である子供の存在によって、否応無しに考えさせられていると言ったほうが適当なのである。彼らは、不幸な結婚生活よりも新たな幸福を求めて離婚することを選択する。それは、親という役割から離れた、「個人」の幸福、成長を求めての選択であり、子供の人生よりも自分のそれが大切であるという、個人主義的傾向を色濃く表したものである。むろん、親も自分の人生を追求する権利はある。しかし、このファランジ夫妻に関しては、離婚が互いに否定的に働くことはあっても、決して彼らを成長させることはない。彼らは、自分の魅力を否定した相手の、人間的な非を公に認めさせるという非生産的なやり方で、失った自分のプライド、女性、男性としてのアイデンティティーを回復しようとするのである。こうして、容赦を知らないビールとアイダは、互いをいかにして痛めつけるかに関心があるあまり、娘であるメイジーを完全に情緒的関心の外側に置いてしまう。子供は、愛情や結合の証どころか、夫婦の憎しみを繋ぐ材料と成り果て、メイジーは、守ってくれるべき両親から、互いを攻撃するための武器として利用されることになるのである。

She [Maisie] was abandoned to her fate. What was clear to any spectator was that the only link binding her to either parent

was this lamentable fact of her being *a ready vessel for bitterness, a deep little porcelain cup in which biting acids could be mixed*. They had wanted her not for any good they could do her, but for the harm they could, with her unconscious aid, do each other. She should serve their anger and seal their revenge... (5) (Italics mine)

ファランジ家の中で、両親からこのような不幸な役割を課せられたメイジーは、幼い頃から継続して様々な辛い体験をしている。例えば父は、娘への心理的影響は全く気にせず、娘宛の母からの手紙を、彼女の面前で愉快そうに暖炉に投げ込む。そして彼は、メイジーの、両親の互いに対する悪言を注ぎ込む「カップ」、そしてそれらを伝達する「メッセンジャー」としての役割を利用して、妻を侮辱しようとし、メイジーの母親でもある妻に対する罵りの言葉を、伝言として、何も知らない無垢な娘に伝えるのである。さらに、同時に母親も、娘を使って同様の仕返しをする。こうして、メイジーの「メッセンジャー」、あるいは「カップ」としての役割は、ファランジ家という繋がりの中では、両親によって十分に利用し尽くされることになるのである。それに加えて父親は、娘が厄介なお荷物になっているということを、こともあろうに、メイジー自身に教え込もうとさえするのである。⁴

離婚裁判の結果、メイジーは両方の親の家の間を半年毎に行き来することになる。そのような中では、安定した「家」という感覚は生まれえない。さらに、自分の存在を迷惑がる両親を見るにつけ、メイジーは、親の不幸の原因は自分にあるのではないか、自分は生まれてくるべきではなかったのではないかといった、自己存在の危機にさらされるのである。彼女は、自分が両親から見捨てられるのではないかといった強い不安に駆られることになった結果、自分が親から見捨てられないために、無意識的に様々な防衛の手段を講じることになるのである。

このような点で、先ず指摘できるのが、メイジーは「良い子」である、ということである。彼女は、親の機嫌を損ねてはいけないということを知っており、親に気を遣い、良い子でなければ見捨てられるかもしれないという

脅迫観念に怯えながら生活しているのである。⁵ このような状況で、彼女が自分の感情を率直に表現できるはずはない。こうして彼女は、次第に子供らしさを失い、あたかも大人の仮面をつけているような、物分かりの良すぎる子供に変わってしまうのである。

そして、メイジー自身、離婚した後も続く両親の緊張した関係のもとで生活するうちに、次第に、両親が自分に課している役割に気付くようになる。彼女は、自分が両親からお互いを傷つける道具にさせられていると直感した後には、両親の関係を自分が悪化させていたことに衝撃を受け、彼らの仲を取り持とうと、また二人の間の緊張関係を解きほぐそうと、親から課せられた、家族の中での不名誉な役割を放棄することを心に決めるのである。そして彼女は、その未熟な頭を働かせて、このように、無残にも引き裂かれてしまった家庭の中に置かれた子供が取るべき役割というものを、自然に習得するようになるのである。それは、彼女が必然的に取らざるを得なかった悲劇的な役割でもあるし、また、彼女自身がこれ以上傷つけないための防衛手段でもあるのである。つまり、それが、メイジーの取った最高の自己防衛の方法である、「愚鈍を装う」という、本論の冒頭で引用した方法なのである。

She [Maisie] had a new feeling, the feeling of danger; on which a new remedy rose to meet it, *the idea of an inner self or, in other words, of concealment*.... Her parted lips locked themselves with the determination to be employed no longer. She would forget everything, she would repeat nothing, and when, as a tribute to the successful application of her system, she began to be called a little idiot, she tasted a pleasure new and keen. (15) (Italics mine)

メイジーのこのような決意は、緊張した家庭のなかで彼女が得た生活の知恵であり、そしてまた一種の適応様式である。彼女が、このような内的な自己へ向かう「秘匿」という技術によって、自分は大人の状況を理解できない間抜けであると両親に認めさせることで喜びを味わうという側面には、幼い

娘の屈折した心理が最もよく表わされていると言えるであろう。あるいは彼女がこのような無能であると両親に知らせることは、他方、彼女の両親に対するある種のメッセージなのかもしれない。子供にとっては、自分が問題児であるという印象を親に与えることで、両親の関心、愛情を引くことは可能なのである。しかし、メイジーの痩せ細った足を見ても、それをもの笑いの種にこそすれ、心配するようなことのない両親であるから、この程度の愚かさを彼女から見せられたからといって、両親の関心が彼女に向けられることはないのである。さらに、皮肉なことに、母親に関しては、メイジーの沈黙が自分に対する無言の批判に思われるため、彼女は娘に対する愛情をさらに失ってしまうことになるのである。

このように、メイジーが幼いながらも心を砕いているにもかかわらず、自分の苦しみを気にも留めてくれない大人たちに対して、彼女はその信用を失うのである。大人とは、彼女が真剣にやっていることを、いとも簡単にあざ笑える存在なのである。メイジーは、嘲笑を受けることで傷つき、彼らに対する不信感を強めていく。そして、彼女の意識は、次第にその内側へと向かっていき、彼女を、ますます自分の感情を率直に表現することのできない、内向的で抑圧された、屈折した子供にしてしまうのである。彼女の人生、大人の世界に対する印象は次のような、薄暗いものであると言える。

Everything had something behind it: life was like a long, long corridor with rows of closed doors. She had learned that at these doors it was wise not to knock — this seemed to produce from within such sounds of derision. (33-34)

このように、メイジーの大人の世界に対する不信の念は、拭いきれないとは言え、彼女の心の中で、両親の存在が完全に否定されてしまうということにはならない。いや、むしろ彼女は、両親の愛情を渴望しているときえ思われるのである。しかし、両親によってそれが満たされることがないために、愛情を求めるメイジーの欲求は、次第に彼女に愛情を与えてくれる他人の存在によってすり変えられることになる。つまり彼女は、愛情を与えてくれる

人物であれば、それが両親でなくとも構わなくなってしまうのである。そして事態は、メイジーのこのような心理状態と、二人の新たな家庭教師の出現、そして両親各々の再婚によって、ますます複雑さを極めていくことになるのである。

II

メイジーは、両親の醜い離婚裁判によって、半年毎に双方の親の家に住むということが決まったのであるが、これは、一人の子供から、定住する場所、つまり、安心して生活できる場所という概念を剝奪するものである。さらにこれに追い打ちをかけるのが、両親が各々再婚するという出来事である。彼らの再婚は、ファランジ家という家族の繋がりを、永遠に抹殺してしまうものである。これは、メイジーにとって、生まれ育った家の「死」を意味し、新たにできた二つの家と二人の義理の親という複雑な状況に、彼女は翻弄されることになるのである。そして、新たな家庭のできた実の両親は、明らかに彼女の世話をすることを迷惑がるようになり、いかにして娘を相手方に長く止めておけるかに固執するようになるのである。

例えば母親、アイダに関しては、裁判の結果、ようやく勝ち取ることできた、娘とともに生活できる権利も、彼女の新たな生活には不必要となる。そして、メイジーを父親の家に引き取りに行き、久しぶりに娘と再開した時でも、彼女に愛情のかけらも見せず、優しい言葉の一つさえもかけてやらず、さらには、彼女を再びその父親の元に預けた後では、6箇月という規定の期間が過ぎても、なかなか彼女を引き取りに行かないなどといったことさえやらかすのである。両親が互いに自分を押し付け合っているという認識が、メイジーに与える心理的影響は非常に大きく、彼女はついに、どこにも居場所を失ってしまったという、家族、そして家の、完全なる喪失感を味わわれるのである。

She therefore recognised the hour that in troubled glimpses she had long foreseen, the hour when ... with two fathers, two

mothers, and two homes, six protections in all, she shouldn't know "wherever" to go. (99)

メイジーのこのような喪失感を一層あおったのは母親で、再婚相手となった Sir Claude が、妻に何の相談もなしに、父親の家からメイジーを引き取ってきたことを知ると、アイダは逆上し、同じ屋敷にいる実の娘と会うことを、3日間拒んだりする。さらに彼女は、最低限の義務と思われる、子供の食事の世話にさえ無関心で、娘がひもじい思いをするなどといったことは気にも留めず、食事係りのお手伝いを全員引き連れて社交界に出かけて行き、自分だけ楽しい時を過ごすことができるような人物なのである。このような母親の娘に対する態度は、父親よりも冷酷である。子供の存在を「無視する」という事実は、彼女の娘に対する虐待のもう一つの例として挙げられるであろう。⁶そして、先程から述べているように、父親もまたメイジーの心を救ってくれるような存在ではないところに、家族の中でのメイジーの悲劇は存在すると言える。母親からの愛情に飢え、さらに父親もその空虚感を補ってこないという状況において、娘は、両親の代理として、次第に家庭教師として雇われた、他人である女性たちを慕うことになるのである。

メイジーには、父、母各々の家で女性の家庭教師が与えられる。そして彼女は、この両者に対して両親に感じる以上の愛情を感じるのである。それは、先ず、父親と結婚し、彼女の義理の母(Mrs. Beale)になる以前の、Overmore 先生に向けられる。メイジーは、親ではなく、彼女に対して、生まれて初めて情熱を感じるのである。

She had conceived her first passion, and the object of it was her governess. It hadn't been put to her, and she couldn't, or at any rate she didn't, put it to herself, that she liked Miss Overmore better than she liked papa ... (22)

しかしオーヴァモア先生以上にメイジーが慕ったのは、年寄りで、子供を亡くしたという Wix 先生なのである。この先生は貧乏で、母親やオーヴァ

モア先生にあるような、美しい魅力といったものからは程遠い、むしろ醜い老婆である。さらに、家庭教師としての資質さえ、実に疑わしいものであると言わねばならない。しかし、メイジーはこの老婆に、他の誰よりも、「安心感」を感じたのである。ウィックス先生は、母親さえも持ち得なかった、メイジーの心の奥深くに触れる何かを備えている人物なのである。この先生は、たとえ母親が優れた人物ではないということが分かっているにもかかわらず、決してそのようなことを幼いメイジーの前では口にしないというデリカシーを備えている。このような、何気ないことに思われる気遣いが、それまで、自分の両親に関しては、悪口しか聞いたことのなかったメイジーには、非常に重要なことに映るのである。そしてメイジーは、母親が与えてくれなかった暖かい抱擁を、ウィックス先生に求めることで、満たされなかった母の愛情に対する渴望という感情を充足させようとするのである。

しかしながら、メイジーがオーヴァモア先生やウィックス先生に、母親代りとしての側面を求めるその根底には、彼女の実の親に対する非常に強い愛情の要求が秘められていると考えられる。それゆえに、メイジーに対して始終優しい物腰というものからは程遠い接し方をしてきた母親が、明らかに猫なで声と分かるような優しさでもって、彼女に接した時でさえ、哀れな少女メイジーは、母から優しく接してもらえたことに素直に喜びを感じてしまう。そして、それまでの辛い経験さえも、全て吹き飛ばされてしまうような気分まで舞い上がってしまうのである。子供にとっては、他人ではなく、「肉親」から愛されているというその事実のみが重要で、それだけで幸福を感じることができるのである。それゆえに、メイジーには、母親の優しさが、実際は上辺だけのものであろうとも、彼女が心の奥底で求めて止まなかった、「家族」の愛として認識され、やはり家族の暖かな絆というものが、ファランジ家にも存在していたのだと、彼女に錯覚させることになるのである。

実のところはこれほど両親を愛していたメイジーであるから、彼女が始終聞かされてきた、両親に対する非難中傷が、いかにこの少女の心を傷付けていたかということは、言うまでもないであろう。それは、殊更褒められることのなかった母親が、心底褒められるのを、彼女が生まれて初めて聞いた時、その心に起こった歓喜によって明らか過ぎるほど明らかになるのである。

メイジーは、クロード卿と二人で散歩をしていた時に、見知らぬ男性を連れた母親に偶然遭遇する。母親夫妻がそのことで口論になっている間、彼女はこの Captain と呼ばれる男性と、母親についての話をすることになる。ウィックス先生を彷彿させるような雰囲気をもつこの男性は、メイジーを安心させると同時に、母親に関して、これまで誰も使ったことのないような褒め言葉を発して、彼女を驚かせる。そして、このような母親に対する賛辞を聞いたメイジーは、その心をひどく揺き乱されることになるのである。

What it appeared to her to come to was that on the subject of her [Ida's] ladyship it was the first real kindness she had heard, so that at the touch of it something strange and deep and pitying surged up within her — a revelation that, practically and so far as she knew, her mother, apart from this, had only been disliked The tears filled her eyes and rolled down her cheeks . . . (151-52)

これは、メイジーの感動の、そして喜びの涙である。キャプテンの母親に対する真摯な感情に触れ、メイジーは、実際母親からひどい扱いを受けてきたにもかかわらず、自分が母親に恐れを感じていたことを恥じ入りさえするようになるのである。

このような一連の激しい感情の起伏は、メイジーが心の奥底では母親を敬愛しているという、隠された彼女の複雑な心理を表しているのである。それゆえに彼女は、たとえ母親が自分と一緒に暮らしたいとは思っていない、つまり、自分を幸せにしてくれるわけではないということが分かっているにもかかわらず、母親の真価を理解しているこの優しい男性こそが、母親を生涯幸せにしてくれる唯一の人物であると信じて、母親のことを永遠に愛し続けてくれるようにと、彼に懇願するのである。

その後、妻との口論を終え、戻ってきたクロード卿に対し、メイジーは、自分とキャプテンとの間に起こった心の交流を隠そうとする。ここで彼女は、親との関係で得た、間抜けを装うことで混乱を避けるという独自の手法を、

クロード卿に対してさえ行使することになるのである。これは、メイジーが、たとえクロード卿との信頼関係を危険に晒すことになっても、すでに母親を嫌っているクロード卿から、母親が掴みかけている幸せな生活を守ろうとする必死の行為、つまり、娘の母親に対する深い愛情が表れた行為として捉えることができるのである。

このように、メイジーの挙動から窺える、アンビバレントな感情こそ、彼女の複雑な幼い心理を表わしていると言える。メイジーがいかに両親を愛し、また彼らからの愛情を求めているかということは、彼女が親から、明らかに見せかけだけの優しさを示されたり、また、その親を肯定的に評価するような人物に出くわしたりした時の、彼女の極端な喜びようを見れば、それは実に明白なのである。つまり彼女は、親から「家」を剝奪された状況で、たとえ親よりも自分を愛してくれる素晴らしい友人を持つとも、この時点では、未だ、肉親に対する無条件の愛情というものを、完全に諦めることはできない状態にあるのである。

ところが、そのようなメイジーのアンビバレントな心理も、クロード卿と彼女との、また彼とその周囲の人々との関係が深まるにつれて、次第に変化を遂げることになる。

III

両親が各々再婚したことにより、メイジーには、同時に4人の親が存在することになるのであるが、中でも彼女が好意を持つのが、母親の再婚相手、クロード卿である。彼もまた、両親同様極めて美しい人物であることに加え、非常に紳士的で、さらに家庭的な側面をも備えている点で、メイジーを魅了する。彼は、これまで誰もしてくれなかったような細やかな心配りで彼女に接するばかりか、彼女をあたかも大人であるかのように扱い、例えば他の人々が、子供であるからという理由で彼女から遠ざけてきたような事柄も、彼女に説明したりするのである。メイジーにとっては、彼は、精神的にも、そして経済的な側面においても彼女を護ってくれる、唯一の頼りにできる大人、ということになるのである。⁷

しかしながら、メイジーとクロード卿との関係も、その裏側にある、彼とビール夫人との秘密の関りの存在によって微妙に変化する。メイジーの義理の両親たちは、世間に非難されることなく、互いの関係を持続させるためには、メイジーの存在が不可欠であると考えている。つまり彼らは、メイジーの無知と愛情を、体裁を整えるための道具として利用するのである。実は、ビール夫人は、彼女が未だ一家庭教師に過ぎなかった頃に、一人暮らしのファランジ氏と同居するために、メイジーを格好の口実として利用したことがある人物なのである。そして今度は、彼女はクロード卿とともに、二人の不倫という関係を持続させるために、その間を取り持つ唯一の存在であるメイジーを、再び、世間に対する口実として利用しようとするのである。

ファランジ家では憎悪を盛るカップという役割を課されていたメイジーは、義理の両親によって与えられるはずの架空の理想の家族の中で、今度は、世間からの非難を避けるための口実としての役割を付与され、再び利用されることになるのである。メイジー自身はと言えば、この不倫の関係にある二人を、そして特にクロード卿を慕っているために、自分に課された役割は、二人の「救済」役であると純粋に信じ、結果として、いずれはこの二人の愛情に護られ、幸せに暮らせる時が来るということを期待して、その仲を取り持つようとするのである。

それゆえに、義理の両親の裏側に秘められた複雑な意図のことなど、メイジーには漠然としか理解できない。彼女は義理の両親を慕っており、そして何よりも、優しいクロード卿と一緒にいられるだけで幸福感に満たされるため、彼女とクロード卿との関係が深まるにつれ、メイジーは、失った自分の家、あるいは実の両親に対する愛着さえも薄れさせていくのである。無論、メイジーが心の一番奥底で求めているのは、肉親からの愛情なのであろうが、彼女のクロード卿に対する愛情が強くなればなるほど、彼女は、本来の自分の家族から距離を置くことができるようになるのである。それは、彼女の家離れ、あるいは親離れの時でもある。つまり、家の外側に愛情を向ける対象を発見することによって、子供は家から離れよう、家族における子供としての役割を終えよう、という衝動に衝き動かされるのである。⁸

そのような彼女に待ち受けているのが、文字通り、両親との「決別」の儀

式である。奇妙なことに、彼女は父親からも母親からもそのような儀式を受けることになる。そして、そこで彼女が体験するのは、最初で最後の両親との心の触れ合いであり、同時に、その優しさの裏に隠された真の意味、つまり実質的に親子の縁を切ることになるという、厳しい現実を受け入れなければならぬと知ることなのである。

メイジーと父親との決別は、思いもかけない時にやってくる。メイジーがビール夫人に連れられて来ていた、博覧会の会場で、彼女は別の女性を連れて父親に遭遇する。そして父親は、妻に責められるのを避けるが如く、メイジーを連れて、同伴していた女性の家へ逃げ帰るのである。しかし、メイジーには、その様なドタバタ劇よりも、父親と久しぶりに再会し、さらに二人きりになれたこと、また、父といるときには始終聞かされていた母親に対する悪口を聞かされずに済んだこと、それらに加えて、父が自分に気を遣ってくれているという状況に、すっかり感激してしまうのである。しばらく見ぬうちに成長してしまった娘の扱い方が分からずに、ただ幼児をあやすように抱擁して、優しい声をかけることしかできない父親の当惑も知らずに、彼女は、その優しさ、愛情に包まれて、幸せな気分を味わう。そして、驚くべきことに、このような些細な出来事のみで、これまでの辛い経験が彼女の心から払拭され、たちまち父親が素晴らしい人物に思ってしまうのである。かつて、キャプテンが母親を絶賛したことで感激した彼女が、感極まってそれに涙したように、メイジーは、長年求めていた父親の暖かい愛情に生まれて初めて包まれた時、再び感涙にむせぶことになるのである。このことは、彼女の幼児、いやむしろ、乳児的な「抱擁」の欲求が、これまでいかに満たされてこなかったかということを端的に示しているであろう。それゆえに、このような欲求の充足が起こっている最中では、この状態を持続させようと、メイジーの精神は、一瞬にして幼児の頃のものへと退行し、彼女は、「良い子」のまままでいることで、このような安定した関係を壊すまいという無意識の衝動に駆られることにさえなるのである。

しかしながら、父親との会話の中で、実際にはもはやそのような幼児であるはずがないメイジーは、父が彼女と別れたがっているということを敏感に悟る。

She began to be nervous again : it rolled over her that this was their parting, their parting for ever, and that he had brought her there for so many caresses only because it was important such an occasion should look better for him than any other. (186)

結局彼女は、自分が涙して喜んだ父親の優しさというのは、最初で最後の、そして、親子離別のシーンに独特の、いわば「演出」だった、ということに気が付き、再び不安の淵に、それも今回は、二度と這い上がれない深遠に突き落とされることになるのである。そして、そのような認識とともに、彼女は、父親の言動の裏に隠された、恐ろしい意図にも気付く。それは、この親子の別れは、「父親が娘を」捨てたのではなく、「娘」の方が、「父親の親切な提案を断わって」、父の元から離れていくものであるという、父親の描いた、身勝手な筋書なのである。哀れにも、娘に対する父親の優しさは、このような暗黙の提案を、彼女が無条件で受け入れることの代償であったのである。

またメイジーは、父親が新たに選んだ、伯爵夫人と呼ばれる女性の存在をどうしても受け入れることができない。というのも、この女性は、明らかに、これまで父親が選んできた女性たちとは異なったタイプの人物なのである。そしてそのような相違点の一つである、この女性がお金持ちであるという事実は、父親が、金銭的なことが目的でこの女性と交際しているという、新たな、そして恥ずべき発見を、メイジーに認識させてしまうことになるのである。ここまで落ちぶれてしまった父親に、子供が心底幻滅を感じてしまうことは避けられない。メイジーはこのような父親を、子供という立場を超えて、同情することにさえなるのである。こうして、メイジーはようやく、彼女の理想の父親という存在、その愛情を求めたり、与えたりする存在を、心理的に「殺す」ことができ、そのような呪縛から解放されることになるのである。⁹

父親に加え、メイジーの親離れの儀式は、母親の側からによっても促される。母親はある日、メイジーが自分を愛していない理由を、クロード卿に責任転嫁して、金切声を上げて彼を責めた上で、メイジーを冷たい娘であると非難する。母親の心中には、自分には気を許さないメイジーが、義理の

父親には許しているということへの嫉妬心もないとは言いきれない。しかし、このような母親の突然の感情の爆発さえも、もはや娘の気持ちを取り戻す契機にはならないのである。むしろ、母親のむら気や身勝手な愛情は、ますますメイジーの心を彼女から離れさせてしまうことになる。この親子の抱える問題の根深さは、メイジーの、“Mamma doesn’t care for me . . . (83)” という言葉に、端的に示されている。これはまた、彼女と母親との間に存在する溝が、もはや修復不可能であるということをも表わしているのである。

このようなこともあり、母親との決別は、父親とのそれほど複雑ではない。さらに、メイジーは、この時点ではすでにクロード卿によって、新たな生活のために、父親の家から内密に連れ出されており、彼女にとっては、母親の存在よりも、彼との新しい生活に対する期待の方が、比較にならないほど重要なのである。メイジーにとっては、母親の登場は、クロード卿との逃避行を中断させられるかもしれないという危険性の存在を意味することになる。彼女は、大好きなクロード卿との生活を望むあまり、父親と同様、優しい態度を示してくれている母親に感動しはするものの、母親との最後の語らいの一時を、何事もないうちに早く終わらせたいとさえ願うのである。

そのような中で、彼女は、母親に対する最後の、そして精一杯の愛情を込めて、母とキャプテンとの幸福を願う言葉を口にする。ところが、思いもかけず、この言葉が、母親の逆鱗に触れてしまうのである。というのも、メイジーの期待とは裏腹に、母は、すでにこの男性との縁を終わらせていたのである。そしてメイジーは、あのような誠実な愛情を母親に対して示していたキャプテンを捨ててしまった、彼女の愚かさに、ぞっとするような恐怖心を覚えるのである。

[T]here rose in her a fear, a pain, a vision ominous, pre-co-cious, of what it might mean for her mother’s fate to have forfeited such a loyalty as that. There was literally an instant in which Maisie fully saw — *saw madness and desolation, saw ruin and darkness and death.* (225) (Italics mine)

言い換えるのなら、母親の幸福を願うといった、大人の世界に口を挟む行為、つまり、メイジーがそれまでファランジ家で自ら課してきた、「愚鈍」を装うという役割から逸脱した行動に出た結果、彼女が見たのは、母親の、救い難い、そして悲惨な運命の予感だったのである。こうしてメイジーは、その親子関係において子供の役割を終えることで、父親に加え、「愛情」の対象としての母親をもその心から完全に抹殺することになる。この時点で、彼女は、父母両方との永遠の離別を受け入れられる程の、精神的な脱皮を遂げているのである。

このような親離れの儀式の後、メイジーは、着実に実の親よりも、義理の親とともに住む方を切望するようになる。とりわけ、乳母のように優しく、理想的な紳士で、さらに経済力もあるクロード卿さえいれば、彼女にとっての「家」は、完成された意味を持つことになるのである。そして、メイジーとクロード卿との心理的な結び付きは、彼が彼女を見捨てたりしないと断言した際、メイジーが彼の肩に頭を埋めて声も立てずに泣いた時に、覆されることのないものとして、彼女の中に確立されるのである。つまり、彼女の心を、これまでずっと覆ってきた、「見捨てられるかもしれない」という独特の不安が、ここで、クロード卿によって、彼女の心から一掃されることになるのである。

メイジーは、親離れを経験することで、自ら選択してきた「かすがい」的子供の役割を放棄する。彼女はもはや、愚かさを装って大人の世界を見て見ぬ振りしたり、自分が沈黙を守ることで、緊迫した人間関係を解きほぐそうとしたりする、親に気を遣う子供ではない。大人の世界の裏側にあるものを否応無しに見せつけられることで、滑稽なくらい早熟にさせられた結果、この一人の不幸な少女は、ようやく自分自身の存在意義を確認することができるようになるのである。

IV

こうして、そのようなメイジーが新たな人生の出発点として求めたものは、クロード卿である。この時点で彼女は、クロード卿以外のものは何も、あの、

母親以上の優しさを示してくれたウィックス先生でさえ、もはや必要ないという、自分自身の内側から沸き上がってくる明確な欲求を知るのである。¹⁰つまり、彼女の望んでいるものは、もはや家族あるいは家庭などといったものではなく、クロード卿という男性ただ一人であると考えられるのである。これは、メイジーが一人の女性としての人生をすでに歩み始めているということを示唆しているとも言えるであろう。それゆえに、彼女には、義理の母親であるビール夫人も、もはや必要ない。彼女はむしろ恋敵であり、それに加えて、実母同様、その情熱によって、クロード卿を苦しめる人物として捉えられるのである。そしてそのようなビール夫人に対するメイジーの感情は、彼女の、“I'd kill her ! (288)” という激しい言葉に顕著に表わされているのである。

このようなメイジーの心理的な変化が行動として最も端的に表れているのが、出発直前の列車が止まっている駅のプラットフォームで、あたかもクロード卿に、駆け落ちを持ちかけるかのように、切符を買ってくれ、そして今すぐ二人でパリへ旅立とうと彼女が言う場面である。彼女のこの突発的な提案は、結局実現しないものの、それは、メイジーが、欲しいものを手に入れようとして、初めて自分の感情を全面的に表に出し、必死に足掻いている姿であると言えるのである。

ところが、皮肉なことに、メイジーは、クロード卿がやはりビール夫人のことを諦められずにいるということを知る。最終的に彼は、メイジーよりもビール夫人を選んだわけで、それは、メイジーが知った、彼の弱さを表わしていると同時に、彼女に、大人の男性がどのようなものであるのかを教えることにもなるのである。そして、メイジーがイギリスへ向けて旅立つ最後の、そして永遠の別れの時に、クロード卿が、バルコニーに出て彼女を見送りさえしてくれなかったという事実も、彼との永遠の別離が、彼女にとって直面しなければならない現実であるという認識を確かなものにする。¹¹ 哀れにもメイジーは、自分の描いた夢が完全に破れたという、この辛い現実を、ここで、全面的に受け入れなければならないのである。

実の両親の間で、微妙な立場に置かれ、最終的には彼らとの縁切りという、稀に見る苦悩を経験した結果、メイジーは、家族の中で背負わされてきた役

割、そして彼女が求め続けてきた家族愛という呪縛から解放され、ようやく自分自身の欲求を表現できる存在への成長を遂げるのであるが、結局彼女は、そのようにしてようやく認識することのできた、たった一つの夢さえも、最終的に失ってしまうのである。そしてこのような、何もかも失ってしまうこととなったメイジーに残されたのは、彼女が相続した遺産と、貧しい老婆、ウィックス先生のみである。この状況は、一方で、今まで護られることを望んできたメイジーが、今度は、彼女を頼りにする孤独な老夫人の家族となって、彼女を守って生きていかなければならないということを意味しているのである。

終わりに

これまで見てきたように、メイジーは、崩壊した家庭で、様々な役割を課され、それを大人たちに利用される一方で、家庭の調和を願って、自らその中でとるべき自分の役割を決定したりしてきた。しかし、その願いも破れ、彼女は、最も愛されても良いはずの家族から、絶対的な孤独感を味わわされることになるのである。その中で彼女は、家族という束縛から解放されることで、また、一人の男性を愛するようになることで成長し、心の奥底で自分が真に求めているものを認識するようになるのである。しかし、同時に知った大人の世界によって、彼女は、自分が欲した夢を永遠に手放さなければならないという皮肉な事態にも陥ってしまう。幼い娘には、少々酷な結末であるかもしれないが、彼女は、自分のことを頼りにする老婆との生活から、今後、精神的に自立した、新たな人生の可能性を、切り開いていかなければならないのである。

本作品が出版された当時は、墮落した物語であるとの批判を受けたこともあった。しかし、現在では、このような類の話は、実際に起こり得るし、部分的にはすでに現実には起こっていると言えるであろう。言い換えるなら、この作品に描かれた家族像が投げかける問題は、小説上の絵空事ではないものとして、我々に捉えられ得るのである。この点で、Henry James の描いたリアリズムの世界は、確実に現代にまで通じているとすることができるのであ

る。さらに、このような複雑な状況に置かれた子供の心理や行動を、彼が、一つも読み紛うことなく、緻密に描き上げているという点では、この作品が、喜劇的とさえ言えるような、非常に分かりやすい対比等を含んだ構成で成っているにもかかわらず、それを、円熟期の作品に繋がるような、立派な小説芸術にまで高めることになっていると言えるのである。

註

1. Henry James, *What Maisie Knew*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1908) テキストの引用は全て本書による。以下、本書からの引用は、本文中の括弧内に頁数のみ記す。
2. 総合研究開発機構編, 『現代アメリカの家族問題』(東京: 出光書店, 1984) p.32-39 参照。
3. 『家族問題』, p.54。以下、夫婦の結婚、離婚の問題に関しては、本書並びに、NHK取材班, 『アメリカの家族: 離婚・再婚・子どもたち』(東京: 日本放送出版協会, 1983) を参照。
4. このような家庭環境は、すでにメイジーの心に陰を落としている。乳母である Moddle が指摘するように、メイジーは、自分が抱えている重圧によって、マッチ棒のような、肉の付かない足になってしまっているのである。このメイジーの不自然な足の細さは、彼女が心身症を病んでいる、つまり、摂食障害を起こしているために発育不全であるということを暗示していると考えられるのである。
5. 斎藤学, 『「家族」という名の孤独』(東京: 講談社, 1995)。以下、親子関係が子供にもたらす影響に関しては、本書を参照。
6. 実際、アイダが本当にメイジーを産み、ここまで育ててきたとは信じられない程である。これまでの生活の中で、彼女が感じることもあったであろう子供に対する愛情を、これほど完全に失うことができるのであろうかという疑問も残るが、このようなことはむしろ、作者 Henry James の人物像の描き方の問題ということになるのであろう。
7. Philip M Weinstein は、*Henry James and the Requirements of the Imagination* (Cambridge: Harvard UP, 1971) p.89 の中で、クロード卿とメイジーとの関係について次のような指摘をしている。

When Sir Claude appears, she makes him the center of her life, its primary source of stability. He stands solid in her world of phantasmagoric

images and becomes the recipient of those feelings her parents have failed to nurture and reciprocate.

8. 斎藤、pp.116-18 参照。子供の家族離れのプロセスの決め手は、「恋」であると述べている。
9. Carren O. Kaston は、“*Imagination and Desire in The Spoils of Poynton and What Maisie Knew*” *Henry James*. *Modern Critical Views*. ed. Harold Bloom. (New York: Chelsea House Publishers, 1987) pp.268-72 の中で、メイジーのこの心理的成長を、エディプスコンプレックスの視点から論じている。
10. メイジーが、クロード卿と二人きりの時には、彼女が食事をとる場面が、その食事の具体的な内容とともに、度々描かれているということが指摘できるのであるが、彼の前ではメイジーの食が進むという事実は、以前は安心して食事をするこすらでなかつたメイジーが、クロード卿の前では心から安心感を抱いて、人間の基本的な欲求を満たすことができているということを表わしているのである。
11. クロード卿がバルコニーに見送りに出てこなかつたことが、メイジーに「子供時代の終焉」を認識させるものとなっているとの指摘もある。Kaston, p.272。